

連載

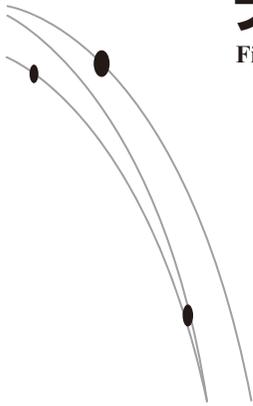
## フィールド・アイ

Field Eye

ケルンから——③

千葉大学 皆川 宏之

Hiroyuki Minagawa



### ドイツのワールドカップ優勝と若者の育成

PK 戦突入もいよいよ現実味を帯びてきた延長後半、試合開始から112分が過ぎたころ、シュールレが左サイドに空いたスペースを突いて中にクロスを上げる。そこには、ゴール左横へ、ディフェンダーの間隙にするりと入り込んでいたゲッツェがいた。小柄なゲッツェが軽くジャンプしながら胸でトラップし、間髪を容れずにシュートすると、ボールはGK ロメロの脇をすり抜けてゴールに吸い込まれていった。

それから10分ほどの後、マラカナンに試合終了のホイッスルが響いた。ゲームが終わったのは、ドイツの現地時刻で23時半ころ、普段であれば、日曜ということもあって、ケルンでは街中であっても外に人気の少ない時間帯である。しかし、この日は話は別で、ほどなくして街中で自動車のクラクションがけたたましく響きだし、道路で花火が打ち鳴らされ始めた。続いて、レストランやバーで観戦していた人たちが街に溢れだし、さらには各所のパブリックビューイングから戻ってくる人たちも加わって、深夜、ケルンの街は、3月のカーニバルのハイライト、パレード(Rosenmontagszug)以来の大騒ぎとなった。カーニバルの期間、ケルンの人たちは思い思いの仮装をして街に繰り出すが、この日の「仮装」の定番はナショナルチームのユニフォームと黒・赤・黄の三色の飾りやフェイスペインティングであった。

ご存じのように、ブラジルで開催された2014年のサッカー・ワールドカップ(Fußball-Weltmeisterschaft)は、アルゼンチンとの決勝を制したドイツの優勝で幕を閉じた。ドイツがこのタイトルを獲

得するのは4度目、1990年以来24年ぶりのことであり、今回はまだ東西ドイツ再統一の前であった。また、ナショナルチームのタイトルとしては1996年のヨーロッパ選手権以来となる。ワールドカップの期間中、テレビには、マテウスをはじめ、ブレメ、ヘスラー、リトバルスキー、アウゲンターラーといった1990年のイタリア・ワールドカップ時の代表メンバーが多く登場していた。この年、筆者は大学生となり、友人のアパートで今回と同じアルゼンチンとの決勝を観たことを思い出し、往年の名選手たちの元気な様子を見て感慨深かった。テレビ画面に映る彼らの紹介テロップにはWeltmeister(世界チャンピオン)の称号が添えられている。今回の優勝メンバーもまた、今後、長く人々の記憶に残り、称えられていくことになるのだろう。

近年、ドイツの代表チームは、ワールドカップやヨーロッパ選手権において、ここ一番でイタリアやスペインに阻まれタイトルには届いていなかったものの、安定して好成績を残してきた。特に最近では優れた選手の層が厚くなり、国内のブンデスリーガも大いに盛り上がっている。こうした躍進の重要な要因の1つに挙げられるのが、若いプレイヤーの育成における成功であり、日本でも海外サッカーのファンにはよく知られている。

ドイツで若年層の育成体制の整備が大規模に行われる契機となったのは、2000年のヨーロッパ選手権における代表チームの一次ラウンド敗退であった。当時、トップレベルの選手は、1990年の栄光を担った世代から順調に交代が進まず、技術的にも体力的にも他国に対して遅れを取っていることが明らかとなっていた。そうした事情のもと、ドイツサッカー連盟(DFB)は、若年層の育成改善と優れた才能の発掘のための取り組みを本格化した。まず、ボールを止めて速く正確に蹴るといふボール扱いの技術を伸ばすことを第一に、年代に応じたトレーニングの方針やプログラムを整備し、その上で、連盟が中心となってドイツ全国にトレーニングのサポートセンター(Stützpunkt)を増設することで、津々浦々の地域クラブを専門のコーチがみて指導し、また、優れた才能をみせる子を集めてセンターで追加的なトレーニングをするなどの活動の拠点を整備した。次に、ブンデスリーガの1部2部に属するような各地の大クラブに、ユースアカデミー(Leistungszentrum)をDFBの基準に沿って整備す

ることを義務づけ、プロを目指す高いレベルの育成環境を整えさせた。また、サッカーのトレーニングと一般的な学業との両立をはかるため、DFBは各地にプロサッカー選手の志望者が通う学校(Eliteschule, エリートシューレ)も設置している。かくして、各地のサポートセンターに才能を持つ子の情報が集まり、適性と意欲のある子は大クラブへと移り、エリートシューレに通いつつ、そのユース部門で研鑽してやがてプロ契約をする、という才能発掘・育成の太い流れができあがった。ブラジル大会のチームの中心を担った、フンメルス、ボアテンク、ケディラ、クロース、エジル、ミュラー、シューレ、ゲツェといった1990年前後生まれの選手たちは、こうした基盤の上で育ってきた申し子というべき世代である。

このように、ある専門領域において、各種の団体や組織の協働を通じて一定の共通の基盤をつくりだし、その土台の上で若者を教育し、もって当該領域全体の質的な向上をはかる、という手法は、ドイツでは、サッカーの世界に限らず広く一般的にみられるものである。すぐに念頭に浮かぶのは、いわゆるデュアルシステムに基づく職業訓練であろう。ドイツでは事務職から現業職まで多岐にわたる業種・職種において、企業や団体の受入れによる職業訓練が実施されているが、職業訓練の内容は業界団体や同業者組合が中心となり、連邦教育研究省や職業教育に関する研究機関も関与しつつ、各領域の専門性を基盤とした客観的な基準に従って定められる。そこには時代の変化に応じた専門的・科学的知見が適宜反映され、改善がなされている。

筆者が専門とする法律学の教育と法曹養成のあり方もまた、基本となる教育を広い裾野にもたらし、また、適性のある者に高度の研究・研修の機会を提供することで専門領域に厚みと発展をもたらし、という点で、上記のサッカーの育成に通底する面もある。ドイツの法学教育では、基本として、Gutachtenstil(鑑定スタイル)と呼ばれる答案作成の型を通じて法律問題に関する論理的思考と記述の様式を身につける方法が明確にされており、学生はその基盤の上で基幹的な法律分野の知識を習得する。さらに国家試験で良好な成績を

修めた者には博士号取得への道が開かれ、博士論文の段階では先端的な応用問題に関する法律論を体系的に叙述することにより、高度の専門知識を身につけることになる。博士号取得からその後の職業に至るキャリアパスも多彩で、現在では、裁判官や専門弁護士が多くが博士号を取得しており、理論と実務を跨ぐ厚い法曹と法学識の層が形成されている。当然、優れた法律家の数も多くなる。

こうした教育や訓練にかかわる基本的なコンセプトは、ごく単純化していえば、専門領域の自律を前提に、共通の基盤を社会的に整備することで基幹的な教育を広く提供し、その上で、各人の適性と成果に応じてさらに高度な段階へと進む道を用意する、というものである。そうした考えに基づき構築されている諸制度は、結果的に、ドイツ社会における各専門の層の厚さや質の保証をもたらし、また、人々のキャリア形成の安定や公正さにも寄与している、というのが、筆者がこの2年ほどドイツで暮らす中で得た実感である。

さて、ワールドカップ優勝の興奮も落ち着いた夏、大学は休みに入り、学生の数も少なくなったが、法学部の研究室や図書館では国家試験を控えた学生たちが厚い本を机に積み上げて勉強を続けている。一方、ケルン大学の周囲には広々とした緑地帯があり、夕方ともなると、しばしばそこで草サッカーがはじまり、プレーする人たちの楽しそうな、ときには熱くなった叫び声が聞こえてくる。図書館の窓から外を眺めると、大人から子どもまで、男女さまざまな年代のグループがサッカーに興じている。子どもたちであっても、ボール扱いはなかなか巧みで、ポジショニングも適切なように見えるのは、育成の成果なのかもしれない。果たして、将来彼ら彼女らが目指すのは、次代のポドルスキー(ワールドカップ優勝メンバーでFCケルンの出身であり、優勝後にケルンを訪れた際には非常に多くの人が集まった)か、それとも、こちら(大学)の道だろうか。

みながわ・ひろゆき 千葉大学法政経学部准教授。最近の主な著作に「『労働者』概念の現在」『日本労働研究雑誌』No. 624。労働法専攻。